寒川神社の古式田打舞神事は、明治初年の神祇制度の改革によって、その旧態がほとんど不詳にて「寒川神社志」に掲載される資料が伝わっているに過ぎない。

昭和六十三年、瀧本宮司は、寒川神社の伝統ある神事を貴重な文化と位置づけ、その奉仕に関し神社神道の正しい姿を以って御神前に具現するべく文化資料の整備を計った。

そこで先づ田打舞神事（福種蒔）の福興について宮司は学友、故小野亮哉氏（前小野照前神社宮司・小野雅楽会会長）に相談を申し上げた。そして、民族芸能の大家、三隅治雄氏（国立文化財研究所芸能部長）の紹介をいただき、制作をご依頼申し上げた。

爾来二年半の歳月を経て、ご関係の各位のご努力により完成されようとしている。来る二月十七日田打舞の復活を見る。

ここに総監修をご奉仕いただいた三隅先生の一文を掲げさせていただく次第である。

復興田打舞（たうちまい）

三隅治雄

翁古面

寒川神社に、田打舞と称する神事芸能が久しく伝えられてきた。二月十七日の祈年祭に、午前十時から拝殿で演じる慣例になっている。

黒式の尉面を顔に当て、烏帽子・狩衣をつけ、襷を掛けた舞人が、拝殿を田圃に見立て、田の畦作りから、田打ち・苗代作り・種蒔き・苗代の見まわり・鳥追いといった稲つくりの過程を模擬的に舞ってみせる。模型の鎌や鍬、アフゴとよぶ竹杖・枡を次々に持ち替えての所作や、枡から稲種を蒔きつつ「蒔こうな、蒔こうな、福種蒔こうな…」と寿詞（よごと）を唱える構成はなかなかにおもしろいが、この形は大正十二年（一九二三）に始まったもので、明治維新前まで行われていたものはこれとは異なる構成であったという。

『寒川神社志』所載「寒川古式祭記」によると、田打舞は一名福種蒔きとも称し、元は正月十五日に演じた。午前十時、神宮が鏡餅と荒稲を献饌し、次いで伶人が古い尉面をかぶり、耕田・種蒔きの形容をなし、榊の枝および中啓を手にして謡舞し、献じた荒稲を拝殿の四方に撒布し、退出した。撒いた荒稲は参詣者がてんでに持ち帰って、苗代種に加えるのをならいにしたという。

舞には歌詞が伴うが、これがきわめて古めかしく、畦作りから鳥追いまでの耕作の遂一をおもしろおかしく描写する。久しく口伝にまかせてきたらしく、意味不明になった語句も多いが、しかし中世に伝播したとみられる田遊び・田打ち・御田などとよばれる農耕芸能の古い詞章の文脈と格調が充分残されていて、昔の舞のたのしさがしのばれる。

今回、瀧本宮司様から田打舞復興の相談があったのも、せっかくこれだけの古格を示す詞章が残っているものを、何とか再生させたいとの趣旨からで、その点から、田遊び・田楽研究に業績のある東京国立文化財研究所民俗芸能研究室長の中村茂子氏と各地民俗芸能の技法研究で著名な国際基督教大学講師の近藤洋子氏の協力を得て、関東・東海・北陸地方の同系の芸能を観察し、それらを参考にしながら詞章を出来る限り生かしての、舞の構成と振付けを、両氏にしていただいた。囃子の作詞は、小野雅楽会副会長の小野貴嗣氏と、江戸里神楽松本流家元の松本源之助氏、日本民俗芸能協会理事の肥後清彦氏の三権威に研究していただいてまとめ、舞歌の節は肥後氏にくふうしていただいた。

舞の構成は、詞章の内容にしたがって、①田打ち　②草敷・代ならし　③種蒔き　④苗ほめ　⑤昼飯　⑥田植え　⑦稲刈り　⑧稲叢と展開する。田の土ならしから収穫に至る過程を次々に模擬していく形で、現行の田打舞と同様に、正面先きに案を据え、そこに鍬・鎌・升などさまざまの執り物をのせ、それを次々に取り替えながら演じていく。舞の主役は白い翁面を当てたいわゆる白尉で、これが終始、地謡（じうたい）と歌を交わしながら所作をする。ただ途中から黒い翁面を当てた黒尉が登場して、鳥追いの所作を演じる。白尉に対する黒尉は、能の「翁」では三番叟の役柄で、静岡県三島市の三嶋大社に伝わる田打舞では、白尉・黒尉が出て、前者を穂長、後者を福太郎とよぶ。両者は舅と婿の関係で、問答を交わしながら田打ちから田植えまでの次第を狂言もどきに演じていく。寒川に伝わる尉面は黒色の切顎で、鼻が大きい。今回はこれを参考に、白と黒の尉面を、日本能雅院会員で面の会主宰の岩崎久人氏が新たに製作してくださった。

舞人は、昔は旧社家の斎藤土佐家の家筋の者が演じたが、大正十二年改作の折りから村持神主の小菅家が勤めるようになり、二代目の小菅正夫氏が黒尉を勤めてくださった。白尉および楽の役はすべて神社の職員で、祈年（としごい）の思いを込めての熱演が期待される。